OUKA
The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

| | |
|---|---|
| Title | 「特別な思い」と「特別の思い」：〈第二形容詞〉と〈第三形容詞〉の揺れについて |
| Author(s) | 中山, 陽介 |
| Citation | 阪大日本語研究. 2004, 16, p. 131-158 |
| Version Type | VoR |
| URL | https://doi.org/10.18910/7224 |
| rights | |
| Note | |

*The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA*

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

『阪大日本語研究』16（2004）

# 「特別な思い」と「特別の思い」
## －〈第二形容詞〉と〈第三形容詞〉の揺れについて－

## “Tokubetsu-na-omoi” and “Tokubetsu-no-omoi”
## －Coexistence between second and third adjectives－

中山　陽介
NAKAYAMA Yosuke

**キーワード**：第二形容詞、第三形容詞（の候補）、共時的分析、通時的分析、テキストタイプ

**【要旨】**

本稿は「特別な思い」と「特別の思い」のような揺れを〈第二形容詞〉と〈第三形容詞〉（の候補）の揺れと位置づけた上で、宮島達夫（1965）の成果に基づき、共時的観点と通時的観点の両方から、どのような単語がどのくらいの割合を占めているのか、どのような変化の傾向が見られるのかを、テキストタイプも考慮しつつ分析したものである。分析より、この揺れは時代差・テキストタイプなど複数の要因が絡み合う複雑な現象であること、そして、安易に意識調査を行っても正確な実態把握はできにくいことが明らかになった。

### 1．研究の目的

近年、「梅田なお店」のような言い方が注目を集めている。「梅田のお店」のような普通の言い方と、〈第二形容詞〉化された「梅田なお店」との違いは、前者は名詞のノ格であることから「梅田にあるお店」という意味で〈関係規定的〉であり、後者は「梅田っぽい（梅田らしい）お店」という意味で〈属性規定的〉である点にある。従って、〈第二形容詞〉化された場合は「もっと梅田なお店」と言えるのに対して、名詞のノ格の場合には〈関係規定的〉であるために「＊もっと梅田のお店」とは言うことができない。

「梅田なお店」のような表現が可能になってくる背景には、次のような事実があると思われる。

① 現代日本語において、〈名詞〉と〈第二形容詞〉は典型的には、はっきりと区別される。例えば、「りんご、学校」は名詞であり、格体系を持つ。一方、「愉快な、きれ

いな」は第二形容詞であり、格体系はない。名詞が規定語として機能する場合には「りんごの木、学校の校舎」のようにノ格である。

② しかし、第二形容詞の文法的な形は、起源的には、名詞の文法的な形から分化発達したものである。従って、第二形容詞と名詞とは形式的に近い関係にあり、「健康、自由、貧乏、満足、親切、けち」のように名詞と第二形容詞にまたがる単語がある。

＜名詞として＞健康が大切だ。健康に気をつける。大切なのは母親の健康だ。健康の秘訣を教える。

＜第二形容詞として＞彼はとても健康だ。健康な人。

③ よって、「梅田」という本来的には名詞（固有名詞）である単語が規定語として機能する場合に〈第二形容詞〉化しても不思議なことではない（後述するように形容詞の最も重要な機能は文中で規定語として機能することである）。

鈴木（1972）『日本語文法・形態論』では名詞と第二形容詞との間には中間的な性格をもつ単語があるという指摘がなされている。その主なものを以下に取り上げる。

① **名詞と第二形容詞にまたがるもの**

健康、自由、親切、乱暴、満足、けち、らく、失礼、……

＜名詞として＞：健康が、健康を、健康の　＜第二形容詞として＞：健康な

② **規定語的な形として「-な」と「-の」の両方の形式が用いられるもので、名詞としての格体系をもたないもの**

特別な／特別の、別な／別の、わずかな／わずかの、……

※①と比較して「特別が、特別を」とは言えない

③ **規定語として「-の」の形式が用いられるが、格体系を持たないもの**

がらがらの（電車）、からからの（のど）、あつあつの（二人）

④ **上の①と②の両方の性格をそなえたもの**

旧式な／旧式の／旧式が（を…）、博学な／博学の／博学が（を…）

実際に、次のように、同じ資料で「特別な思い」と「特別の思い」のように二つの形式が使用されている。

(1) 2002年のワールドカップ（W杯）については「特別の思いはあるが、先のことは分からない。目の前の一日、一試合を大事にして、その先にW杯（出場）があれば

よい」。(毎日2000)

(2) イチロー選手はまず「(大リーグで) プレーすることが目標だったが、スプリング・キャンプに参加するなど特別な思いを抱いていたチームに加わることができ、光栄に思って……、光栄に思っています」と語った。(毎日2000)

鈴木 (1972) で述べられている点について、「特別な思い」と「特別の思い」のように規定語として機能する場合の「-な」と「-の」の二つの形式が実際にどのように使用されているのかについて実例を用いてきちんとまとめた研究はあまり見当たらない。

そこで、名詞を修飾する「-な」と「-の」の二つの形式が、「実際にどのような単語が、どのくらいの割合を占めて揺れているのか」そして「その揺れの中になにか傾向がないのか」ということについて明らかにしていきたい。

## 2．先行研究

名詞を修飾する「-な」と「-の」の形式を扱った研究はこれまで主に意識調査や辞書の品詞記述の揺れを指摘したものがほとんどであり、実例による考察は行われていなかった。その中で田野村 (2002) と宮島 (1965) は実例を用いて調査・分析を試みた論文であり、管見の限りではこの二つの論文以外に実例を用いて調査・分析をしているものは見当たらない。以下、この二つの論文を概観し、問題のありかを提示していく。

田野村 (2002) では「-な」と「-の」の形式が選択される要因[1)]を指摘し、そのうち「有○」と「無○」の対を対象に、形式が選択される要因として形容動詞の性質が関与しているのかどうか考察している。しかし、一つの要因の関与について考察しているので、結論として確かなものとは言いづらい面が論文からうかがえる。「「な」と「の」の選択は多数の要因によって複合的に支配されている複雑な現象である」(田野村2002：212) とあるように、「-な」と「-の」の形式の揺れについて考えるには、やはり形式が選択される要因を一つ一つ紐解いていくより他はないように思う。形式が選択される要因の全体像が見えてきてこそ、田野村 (2002) のような対象を絞り込んで考察するやり方が生きてくるのではないだろうか。

宮島 (1965) では国立国語研究所 (1962)『現代雑誌九十種の用語用字』調査[2)]で体言にかかる「-な」と「-の」の形式で問題となる語を調査での数値とともにリストアップしている。リストアップされた語の中には「-な」と「-の」の形式がどちらか一方の形式のみで使用している語もあれば、両形式が併用されている語もある。

宮島（1965）における一番の業績は「どの語が揺れているのか」ということについて、実際に揺れている語を資料として提示している点にあると思われる。しかし、「揺れについて何か傾向がないのか」という点には及んでいない。さらに、得られた数値が少ないために例外的な用例かどうかという判定がしにくく、全体としての傾向を得るには問題がある。

以上、田野村（2002）と宮島（1965）を概観すると、本研究の目的である「どの語がどの割合で揺れているのか」、そして「その揺れの中には何か傾向がないのか」ということについては触れられていない。そこで、本研究では宮島（1965）でリストアップされた語について、大量の電子化資料を使って調査を行い、主に〈量的な観点〉から分析をすることで「-な」と「-の」の形式の揺れについて、全体的な傾向を明らかにするとともに、形式が選択される要因を少しずつ紐解いていきたい。つまり、先行研究との関わりでいえば、宮島（1965）で触れられていなかった点について、別の資料から検証して明らかにしていくという位置づけになる。

## 3．本研究の立場

ここでは本研究の立場を明示する。はじめに、「-な」と「-の」の形式を品詞論の観点から文法的に位置づける。次に、〈量的な観点〉と〈質的な観点〉について考えを述べる。

### 3．1．「-な」と「-の」の形式の品詞論的位置づけ

まず、「-な」と「-の」の形式を品詞論の観点から位置づけを行う。しかし、品詞についての記述には揺れが見られ、先行研究を概観しても「-な」と「-の」の形式の品詞論的位置づけにも揺れがある[3]。品詞論の問題について深く言及することは本研究の目的から外れることになるので、本研究では鈴木（1972,1980）の枠組みに従って考えることにする。二つの形式は鈴木（1972,1980）の立場による品詞論の観点から次のような位置づけをすることができる。

- 「-な」の形式は〈第二形容詞〉が規定語[4]として機能するときに用いられる形式である。この形式の形容詞としての構文論的機能は主要的である。そして、規定語としての基本的な文法的意味は〈属性規定的〉である。
- 「-の」の形式は名詞が規定語として機能するときに用いられる形式である。この形式の名詞としての構文論的機能は主語や補語の機能よりは副次的な役割を担う。そして、規定語としての基本的な文法的意味は〈関係規定的〉[5]である。

「-な」と「-の」の形式は文中で規定語として機能する点で共通している。しかし、両者は位置づけられる品詞の働きによって二つの形式は基本的に区別されている。

では、「特別な思い」と「特別の思い」のような「-な」と「-の」の形式の揺れはどのように捉えることができるのか。本研究では村木（1998,2000）の〈第三形容詞〉の枠組みを提示した上で、鈴木(1972,1980)の品詞論の枠組みと絡ませて位置づけを行っていきたい。

村木（1998）によると、「-の」の形式のうち、「がらあきの」「風邪気味の」のように名詞が形態論的カテゴリーとして持つ格の体系を失って、文中で名詞の本質的な構文論的機能である主語や補語としての働きをせず、主に規定語として機能している形式がある。これらの形式は形容詞の品詞論的特徴とほぼ一致し、規定語としての文法的意味も〈属性規定的〉であり、〈第三形容詞〉として位置づけることができるのではないかと記述している。村木（2000）では〈第三形容詞〉に属する語の傾向[6]を指摘し、位置づけられる語はかなりの数を占め、特殊例ではないことを述べている。

ここで〈第三形容詞〉の規定について、鈴木（1972,1980）の枠組みに従って若干の修正を加える。村木（2000）では「ひとかどの」「無類の」などは規定語の形式しか機能せず、連体詞もしくは連体機能のみを持つ不完全形容詞という位置づけが妥当であるとしている。鈴木(1972,1980)では基本的に連体詞を主要な品詞とみとめない立場をとるので、「ひとかどの」「無類の」のような形式も〈第三形容詞〉に含めて考えることとする。

**【表１】「-な」と「-の」の形式の位置づけ**

| | ① | ② | ③ | ④ | ⑤ |
|---|---|---|---|---|---|
| 規定語になる形式 | 「-の」 | 「-の」<br>「-な」 | 「-の」<br>「-な」 | 「-の」 | 「-な」 |
| 格体系の有無 | 有り | 有り | 無し | 無し | － |
| | 名詞 | | | 〈第三形容詞〉 | 〈第二形容詞〉 |
| ［例］ | りんご-<br>机-<br>遊び- | 健康-<br>自由-<br>親切- | わずか-<br>特別-<br>さまざま- | 大荒れ-<br>上々-<br>がらあき- | しずか-<br>おだやか-<br>立派- |

表１で②と③に注目する。②と③は格体系の有無によって区別される。②の「-の」の形式は格体系を持つことで名詞の本質的な特徴を保持している。よって、②は〈第二形容詞〉と〈名詞〉のかさなりと位置づけられる。一方、③の「-の」の形式は格体系を持たず、名詞の本質的な特徴を保持していない。「-の」の形式は鈴木（1972）のように〈第二形容詞〉

の変種とも位置づけができるが、ここでは村木（1998,2000）の規定から〈第三形容詞〉と認めて、〈第二形容詞〉と〈第三形容詞〉が揺れているという位置づけを行いたい。よって、本研究ではこの〈第二形容詞〉と〈第三形容詞〉の揺れについて考えていくということになる。

ゆえに、本研究では宮島（1965）でリストアップされた語を調査対象語とするので、〈第三形容詞〉として位置づけるためにはそれらの語について格体系の有無を個別に調べることが必要になる。しかし、本研究では格体系の調査を一語一語行うことは時間的に困難であり、本来の目的に応じた分析が十分にできなくなる可能性があるので調査をしていない。宮島（1965）でリストアップされた語の中には格体系を（部分的に）持つものがあると思われる[7]ので、本研究では「-の」の形式は〈第三形容詞〉（の候補）[8]として位置づけておく。以上の流れを図式化すると表のようになる。

**【表２】「-の」の形式の本研究における位置づけ**

| | ひとかど-<br>無類- | がらあき-<br>泥だらけ- | 特別-<br>わずか- | 名誉-<br>秘密- | りんご-<br>机- |
|---|---|---|---|---|---|
| | 「-の」 | 「-の」<br>述語 | 「-の」<br>「-な」<br>述語 | 「-の」<br>「-な」<br>述語 | 「-の」<br>述語 |
| 格体系の有無 | 無し | 無し | 無し | 有り | 有り |
| 規定語の<br>文法的意味 | 属性規定的 | | | ※ | 関係規定的 |
| 「-の」の形式の<br>本研究の位置づけ | 〈第三形容詞〉<br>〈第三形容詞〉（の候補） | | | | 名詞 |

● ※は〈属性規定的〉なものを〈第三形容詞〉（の候補）とみなす。

### ３．２．〈量的な観点〉と〈質的な観点〉

本研究では、〈量的な観点〉からの分析に主眼を置いて進めていくが、〈質的な観点〉からの分析を最初から無視していたわけではない。最初は〈質的な観点〉から研究を始めたが、必ずしも単純にははっきりした結果を得ることができなかった。例えば、単語によって「-な」と「-の」の形式との間に被修飾語についての違いを見出すことができそうであるという予想が立つかもしれない。

(3) ただ、作成を終えたとする82.3%の中にも簡易プランでとりあえずサービスを受けている人も相当数含まれており、今月中に正式なプランの作成を終えないと、今

後の費用精算に支障が出る恐れがある。(毎日2000)

(4) 再生計画案が「案」じゃなくて、承認された正式の計画になるには債権者の半分以上の同意が必要になる。(毎日2000)

(5) 宇多田さんが甲子園の球児たちに寄せたメッセージは「ことさら輝いてやろうぜい！」。そして「去年はいろいろな賞を頂きましたが、甲子園の入場行進曲に選ばれたのはまた格別の嬉（うれ）しさ！。それ以上に高校生として、皆さんを応援できることに誇りを感じます」と、同世代の仲間の「輝く春」を応援している。(毎日2000)

(6) 「甲子園の入場行進曲に選ばれたのは、格別な嬉（うれ）しさ！」――。「First Love（ファースト・ラブ）」が入場行進曲に決まり、宇多田ヒカルさんは「同じ高校生として、皆さんをこういう形で応援できることに誇りを感じます」とメッセージを寄せた。(毎日2000)

しかし、上の例のように「-な」と「-の」の形式とで被修飾語の意味・タイプが共通する場合や、「特別な思い」と「特別の思い」のように、両方の形式で同じ被修飾語が使われている場合が存在する。また、被修飾語に違いが見られても、被修飾語の名詞をタイプ化して傾向を探るには少し厳しい気がする。よって、現段階で被修飾語の性格などによって分析することは困難であると言える。

ゆえに、まずは共時的観点と通時的観点から量的な側面に焦点をあてることで実態を把握し、その後で言語内的な分析を行っていく手順をとるのがよいと判断したのである。「-な」と「-の」の形式の揺れには言語外的要因が絡んでいることは田野村（2002）などでも指摘されてきた。しかし、実例から実際に言語外的要因を指摘することやその要因がどの語について見られるのかについてはこれまで行われていない。〈量的な観点〉から分析し、対象語について傾向を導くことは、どの語に言語外的要因が絡んでいるのかの特定にもつながる。

ただ、〈量的な観点〉からの分析であっても本研究では分析に統計学的手法をとっていない。あくまで〈質的な観点〉からの分析を見据えた上で、その探索的な段階として〈量的な観点〉からの分析を行っている。ただ、数を数えるだけではなく、出てきた用例を一つ一つ見極めた上での結果であることをことわっておく。

## 4．研究方法

大量の電子化資料を使って、宮島（1965）でリストアップされた語について、名詞を修飾する「-な」と「-の」の形式を含む用例を収集する調査を行う。そして、その調査を通して「-な」と「-の」の形式が「どの語について、どういう割合で揺れているのか」、さらに「その揺れの中に何らかの傾向を見出すことができないか」ということを〈量的な観点〉から分析していく。以下、具体的に研究方法について見ていく。

### 4．1．調査対象語

本調査では前節で取り上げた宮島（1965）で挙げられている141語のうち、語が不確定であり膨大な数のデータを扱う恐れのある「～的-」を除いた140語を調査対象語とする。表でそのリストを示す。表3は調査対象語を宮島（1965）の数値によって「-な」の形式だけで使用されるもの、「-の」の形式だけで使用されるもの、「-な」と「-の」の形式が併用されているものの三つに分けてまとめたものである。表3より調査対象語は名詞として典型的な〈ひと名詞〉や〈もの名詞〉ではなく抽象的な語がほとんどであることがわかる。文法的な位置づけは3.1.で規定したように〈第二形容詞〉と〈第三形容詞〉（の候補）の揺れと捉える。

**【表3】宮島（1965）の数値による調査対象語の分類**

| | |
|---|---|
| 「-な」の形式のみ | 異質（9）、異常（9）、莫大（6）、主要（5）、真赤（5） |
| | 著名（4）、古風（3）、神聖（3）、不きげん（3）、不適（3）、真暗（3）、過剰（2）、高名（2）、詳細（2）、大好き（2）、手近（2）、身近（2）、意地悪（1）、いびつ（1）、肝要（1）、最適（1）、中途半ぱ（1）、透明（1）、非凡（1）、不名誉（1）、奔放（1）、真青（1）、未熟（1）、耳より（1）、無制限（1）、有害（1） |
| 「-の」の形式のみ | 普通（54）、はじめて（18）、たくさん（13）、独特（12）、かんじん（10）、かなり（9）、たいてい（9）、個々（8）、必死（8）、よほど（6）、薄手（5）、永遠（5）、最悪（5）、適度（5）、得意（5） |
| | 固有（4）、最良（4）、多額（4）、直接（4）、太目（4）、無実（4）、あたりまえ（3）、永久（3）、大つぶ（3）、絶好（3）、そっくり（3）、類似（3）、古参（2）、最善（2）、順当（2）、新鋭（2）、相応（2）、だぶだぶ（2）、手ごろ（2）、不動（2）、不滅（2）、別々（2）、未曽有（2）、無限（2）、名誉（2）、文字どおり（2）、有数（2）、洋風（2）、良質（2）、悪質（1）、一様（1）、腕きき（1）、重ね重ね（1）、型やぶり（1）、金目（1）、緊急（1）、屈強（1）、散々（1）、新式（1）、たいがい（1）、多忙（1）、多様（1）、どっちつかず（1）、どろだらけ（1）、ないしょ（1）、抜群（1）、非公式（1）、非能率（1）、秘密（1）、不要（1）、真黒（1）、無傷（1）、無名（1） |
| 両形式が併用 | いろいろ（45/35）、大事（18/1）、意外（13/2）、相当（13/18）、特殊（12/2）、わずか（11/11）、さまざま（10/8）、特別（8/14）、別（7/32）、純粋（6/3）、特有（2/11）、同様（2/10）、独自（2/7）、格別（2/5）、当然（1/21）、種々（1/15）、共通（1/8）、特定（1/8）、反対（1/8）、厚手（1/6） |

| | |
|---|---|
| | 正常（4/1）、正式（3/4）、特異（3/2）、不審（2/3）、別個（2/3）、無用（2/3）、色白（2/2）、好適（2/2）、好調（1/4）、上等（1/4）、正反対（1/4）、旧式（1/2）、異色（1/1）、過大（1/1）、細心（1/1）、水平（1/1）、でたらめ（1/1）、非常識（1/1）、人なみ（1/1）、不相応（1/1）、安上がり（1/1） |

- 語幹のみで示す
- （ ）内の数値は宮島（1965）の数値である。両形式が併用されている場合の数値の記し方は（「-な」の形式の数値／「-の」の形式の数値）である。
- 各分類とも宮島（1965）の数値が5以上の語と5未満の語に分け、それぞれ数値が多い語の順に並べて記載している。両形式が併用されている場合は「-な」と「-の」のいずれかの数値が5以上の語といずれも5未満である語とを分けている。

実際の調査は調査対象語140語が実際にどのように揺れているのかということについて、大量の電子化資料を使って調べていくことになる。しかし、宮島(1965)の数値は語によって少ないものも存在している。調査結果が分析に適するかどうか疑わしいものがあると考えられる。調査対象語のうち、どの語を分析に用いていくのかを別に選び出していく必要がある。

### 4．2．調査資料

本調査ではテキストタイプを新聞・小説に定めて用例を収集する。新聞データは『毎日新聞全文記事データベース　CD－毎日新聞2000年版』を用いる。小説データは通時的観点からの分析を試みたいので、現代と明治期の作品を取り上げる。次に、小説作品のサンプリング方法について記す。

① **現代作品について**

『CD新潮文庫の100冊』、『CD新潮文庫の絶版100冊』、青空文庫のうち、1980年以降の作品を選び用例を収集した。青空文庫についてはデータが整っていないものもあるので、作品が1980年以後であるか作者が1960年以後の生まれであることのいずれかのデータが存在するもののみを大量に用例を収集する理由から便宜的に用いることとした。

② **明治期の作品について**

『CD新潮文庫　明治の文豪』のうち、小説作品で言文一致体（口語体）のものを扱う。データの中には翻訳作品、詩歌、大正期の作品が含まれているので、これらの作品のデータを削除する作業をとった。

また、資料はデータとしては限定されたものになってしまうが、できるだけ大量に用例

を収集したい目的から電子化資料を用いている。これらは青空文庫を除いて、いずれも日本語学研究室で購入し、使用承諾を得たものを使用している。

### 4．3．調査方法

① データからgrep検索で用例を収集する。調査対象語の中には別の表記が考えられる語も存在する。本調査では表4にまとめた異表記調査語について、表中に挙げてある表記のみ用例収集の対象として含めている。表4にまとめたもの以外に考えられる別の表記は一切対象としない。

【表4】異表記調査語のリスト

| 論文での表記 | 調査で対象とした表記 | 論文での表記 | 調査で対象とした表記 |
|---|---|---|---|
| あたりまえ- | あたりまえ-、当たり前- | ないしょ- | ないしょ-、内緒- |
| いろいろ- | いろいろ-、色々- | はじめて- | はじめて-、初めて-、始めて- |
| 腕ききき- | 腕ききき-、腕利き- | 人なみ- | 人なみ-、人並み- |
| 大つぶ- | 大つぶ-、大粒- | 不きげん- | 不きげん-、不機嫌- |
| 型やぶり- | 型やぶり-、型破り- | 太目- | 太目-、太め- |
| かんじん- | かんじん-、肝心- | 真赤- | 真赤-、真っ赤- |
| さまざま- | さまざま-、様々- | 真暗- | 真暗-、真っ暗- |
| たいがい- | たいがい-、大概- | 真黒- | 真黒-、真っ黒- |
| たいてい- | たいてい-、大抵- | 真青- | 真青-、真っ青- |
| 中途半ぱ- | 中途半ぱ-、中途半端- | 耳より- | 耳より-、耳寄り- |
| 手ごろ- | 手ごろ-、手頃- | 文字どおり- | 文字どおり-、文字通り- |
| どろだらけ- | どろだらけ-、泥だらけ- | わずか- | わずか-、僅か- |

② 用例を眺めて、不適切なものを削除していく。用例に不適切なものとは主に「-なので」「-など」のように名詞を修飾していないものや「-なのは」のように準体助詞に修飾している場合や「1000円相当の-」や「日本独自の-」のように前要素がくっついて、一単語となっている場合である。

### 4．4．分析の枠組み

ここでは調査結果を踏まえて、実際の分析の枠組みを提示する。はじめに、本研究の調査で収集した用例数を表5にまとめる。

【表５】全体の用例数

| | 新聞 | 現代小説 | 明治小説 | 合計 |
|---|---|---|---|---|
| 「-な」 | 11164 | 801 | 509 | 12474 |
| 「-の」 | 15858 | 1011 | 905 | 17774 |
| 合計 | 27022 | 1812 | 1414 | 30248 |

分析は共時的観点からの分析と通時的観点からの分析を試みる。また、４．１．で述べたように、調査対象語の中には数値が少なく、分析に適さない語も存在するので、どの語を分析に用いるのかを選ぶ必要がある。本研究では共時的・通時的の両方の分析について、「-な」と「-の」の数値でいずれの形式の数値も５未満でない語を分析対象語として用いる。

分析方法として、調査結果をまず分析対象語別に表でまとめる。さらに、調査結果で「-な」と「-の」の形式が占める割合が揺れている語についてはグラフで表し、対象語別・時代別・テキストタイプ別などの観点から各形式の占める割合を比較できるようにする。

## ５．共時的観点からの分析

ここでは共時的観点からの分析を試みる。現代の言語資料（新聞・現代小説）についての調査結果から「-な」と「-の」の形式がそれぞれどれだけの割合を占めているのか。そして、そこからどういう傾向を読み取ることができるのかということを考えていきたい。

新聞・現代小説の両方のデータについて、「-な」と「-の」の形式の数値でいずれの形式の数値も５未満でない74語を分析対象語として用いる。分析対象語全体の用例数を表６にまとめる。また、分析対象語ごとの数値を表７で示す。

【表６】分析対象語全体の用例数（共時的：74語）

| | 新聞 | 小説 | 合計 |
|---|---|---|---|
| 「-な」 | 9713 | 739 | 10452 |
| 「-の」 | 13687 | 951 | 14638 |
| 合計 | 23400 | 1690 | 25090 |

【表７】分析対象語別結果（共時的観点）

| | 毎日2000 | | 現代小説 | | | 毎日2000 | | 現代小説 | |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| | 「-な」 | 「-の」 | 「-な」 | 「-の」 | | 「-な」 | 「-の」 | 「-な」 | 「-の」 |
| 悪質 | 271 | 0 | 6 | 1 | たくさん | 0 | 444 | 0 | 22 |
| あたりまえ | 1 | 253 | 0 | 9 | 多様 | 519 | 0 | 8 | 1 |
| 厚手 | 0 | 13 | 0 | 9 | 中途半ぱ | 109 | 0 | 17 | 0 |
| 意外 | 328 | 2 | 22 | 0 | 直接 | 0 | 247 | 0 | 12 |
| 異質 | 51 | 12 | 15 | 2 | 著名 | 138 | 0 | 8 | 0 |
| 異常 | 289 | 11 | 33 | 3 | 手ごろ | 48 | 0 | 6 | 0 |
| 異色 | 0 | 124 | 0 | 6 | 手近 | 17 | 0 | 4 | 12 |
| いろいろ | 862 | 15 | 58 | 2 | 当然 | 7 | 455 | 6 | 59 |
| 色白 | 0 | 5 | 3 | 14 | 透明 | 103 | 19 | 33 | 14 |
| 薄手 | 0 | 10 | 0 | 7 | 同様 | 37 | 1150 | 5 | 9 |
| 永遠 | 1 | 178 | 0 | 14 | 特異 | 153 | 1 | 6 | 1 |
| 大つぶ | 0 | 37 | 0 | 12 | 独自 | 10 | 980 | 5 | 13 |
| 格別 | 9 | 28 | 6 | 4 | 特殊 | 304 | 1 | 31 | 0 |
| 過剰 | 3 | 155 | 12 | 0 | 特定 | 0 | 534 | 0 | 19 |
| かなり | 2 | 387 | 1 | 78 | 独特 | 10 | 980 | 4 | 23 |
| かんじん | 73 | 157 | 6 | 17 | 特別 | 408 | 115 | 23 | 17 |
| 旧式 | 1 | 15 | 1 | 5 | 特有 | 5 | 56 | 0 | 10 |
| 共通 | 7 | 312 | 0 | 23 | はじめて | 0 | 1043 | 0 | 69 |
| 高名 | 32 | 2 | 5 | 0 | 反対 | 0 | 273 | 0 | 22 |
| 個々 | 0 | 328 | 0 | 8 | 必死 | 7 | 100 | 2 | 11 |
| 古風 | 31 | 1 | 12 | 0 | 秘密 | 1 | 105 | 0 | 13 |
| 固有 | 5 | 62 | 0 | 6 | 不きげん | 13 | 0 | 14 | 0 |
| 最悪 | 4 | 313 | 1 | 9 | 不審 | 202 | 6 | 9 | 3 |
| 最善 | 0 | 92 | 0 | 6 | 普通 | 0 | 868 | 0 | 77 |
| さまざま | 3044 | 43 | 84 | 8 | 別 | 43 | 2814 | 61 | 114 |
| 種々 | 1 | 64 | 0 | 8 | 別個 | 0 | 12 | 0 | 6 |
| 純粋 | 112 | 8 | 22 | 4 | 別々 | 0 | 67 | 0 | 7 |
| 詳細 | 230 | 4 | 8 | 1 | 真赤 | 88 | 0 | 17 | 0 |
| 正式 | 228 | 25 | 6 | 14 | 真暗 | 23 | 0 | 13 | 1 |
| 正常 | 165 | 4 | 27 | 4 | 真黒 | 25 | 1 | 8 | 0 |
| 正反対 | 1 | 62 | 0 | 13 | 身近 | 456 | 2 | 9 | 0 |
| 絶好 | 2 | 222 | 0 | 9 | 無限 | 0 | 61 | 0 | 13 |
| 相当 | 214 | 128 | 17 | 26 | 無実 | 0 | 54 | 0 | 22 |
| そっくり | 9 | 17 | 2 | 8 | 無用 | 24 | 37 | 2 | 5 |
| 大事 | 546 | 0 | 47 | 0 | 文字どおり | 0 | 41 | 0 | 6 |
| 大好き | 186 | 0 | 5 | 0 | よほど | 0 | 36 | 0 | 9 |
| たいてい | 0 | 65 | 0 | 25 | わずか | 255 | 31 | 49 | 6 |
| | | | | | 合計 | 9713 | 13687 | 739 | 951 |

表７から分析対象語の調査結果によって、大きく二つの場合に分けることができる。

- 「-な」と「-の」の形式が併用されている場合（５．１．）
- 「-な」と「-の」の形式がどちらか一方の形式のみで使用される場合（５．２．）

### 5．1．「-な」と「-の」の形式が併用される場合

分析対象語のうち、48語は新聞・小説のいずれかで「-な」の形式と「-の」の形式が併用されていた。さらに詳しく分析していくために、この48語の調査結果をグラフに表す。グラフから形式の揺れ方にはいくつか傾向があることがわかる。揺れ方にこのような傾向があることは先行研究では全く指摘されていない。以下、順次述べていくことにする。

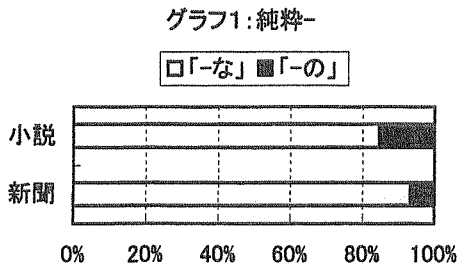
- 新聞・小説の両方で一方の形式が圧倒的な割合を占めるもの（5．1．1．）
- 新聞・小説で「-な」と「-の」の形式が占める割合に変化があるもの（5．1．2．）
- その他のもの（5．1．3．）

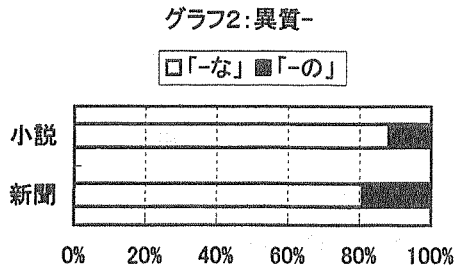
#### 5．1．1．新聞・小説の両方で一方の形式が圧倒的な割合を占めるもの

##### 5．1．1．1．「-な」の形式が圧倒的な割合を占めるもの

この傾向に属する語は19語あった。「-な」の形式が圧倒的な割合を占めることは逆に「-の」の形式が例外的な用例として現れている可能性も孕んでいると考えられる。ただ、今回のグラフによる分析からは「-の」の形式の用例が例外的なものかどうかは判断できない。「-の」の形式の現れ方、用例数で五つの傾向を指摘することができる。以下、傾向ごとに見ていく。

(a) **［さまざま-、異質-、いろいろ-、異常-、純粋-、わずか-］**：新聞・小説の両方で「-の」形式が現れ、さらに新聞で現れる用例数は5例以上である。「さまざま-」、「異常-」、「純粋-」の3語は新聞より小説の方が「-の」の形式が現れる割合が大きい。また、「異質-」は小説より新聞の方が「-の」の形式が現れる割合が大きい。

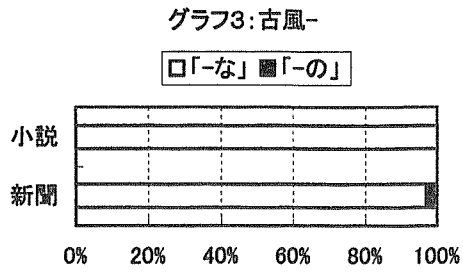


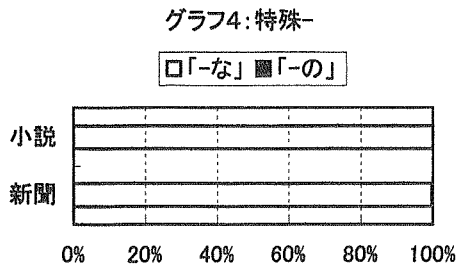




(b) **［高名-、古風-、真黒-］**：新聞で1～2例、「-の」の形式が現れている。

(c) **［特殊-、身近-、意外-］**：先に挙げた**［高名-、古風-、真黒-］**と同様に新聞データで1～2例、「-の」の形式が現れている。しかし、この3語のグラフは後述する「-な」の形式のみで使用される場合のグラフに近い（グラフ17参照）。この点で**［高名-、**

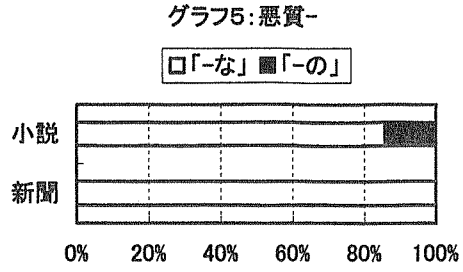
古風-、真黒-] と区別することができる。

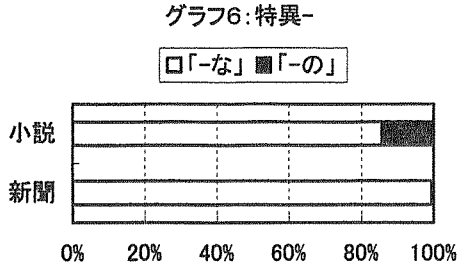



(d) [あたりまえ-、悪質-、多様-、真暗-]：いずれの語も小説で1例のみ「-の」の形式が現れている。

(e) [正常-、詳細-、特異-]：新聞・小説の両方で「-の」の形式が5例未満で現れ、小説のほうが「-の」の形式が占める割合が大きい。




以上、これら五つの傾向から形式の表れ方にはテキストタイプが影響していると推測することができる。しかし、「-の」の形式の用例数が少ない語がほとんであることやグラフの現れ方が「-な」の形式のみで使用される場合に近い語があることの二点から「-の」の形式は例外的な用例である可能性もあり、断言はできない。

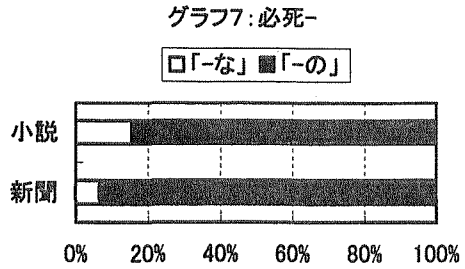
5．1．1．2．「-の」の形式が圧倒的な割合を占めるもの

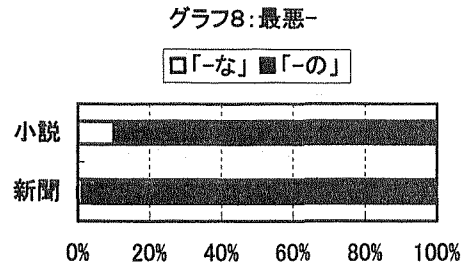
この傾向に属する語は15語あった。「-の」の形式が圧倒的な割合を占めることは逆に「-な」の形式が例外的な用例として現れている可能性も孕んでいると考えられる。ただ、今回のグラフによる分析からは「-な」の形式の用例が例外的なものかどうかは判断できない。「-な」の形式の現れ方、用例数で四つの傾向を指摘することができる。以下、傾向ごとに見ていく。

(a) [必死-、旧式-]：「-な」の形式が新聞・小説の両方で使用され、その割合は小説

の方が大きい。但し、「旧式-」は新聞・小説共に「-な」の形式が1例ずつしか現れていないことに注意が必要である。

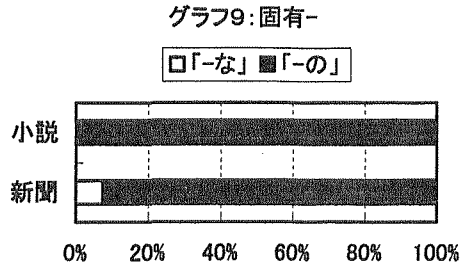
(b)　[色白-、独特-、当然-、最悪-]：「色白-」が新聞で「-な」の形式が現れていないことを除けば、新聞・小説の両方で「-な」の形式が使用され、その割合は小説の方が大きい。しかし、新聞データのグラフでの現れ方が「-の」の形式のみで使われる場合のグラフに近い点で先の[必死-、旧式-]とは区別できる。

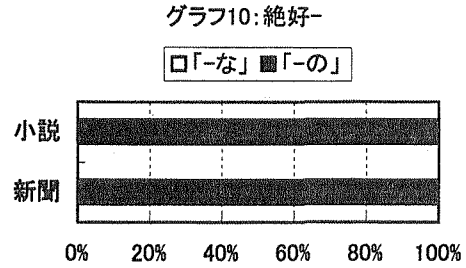



(c)　[固有-、特有-、共通-]：「-な」の形式が新聞のみで現れている。

(d)　[正反対-、種々-、絶好-、秘密-、永遠-、かなり-]：「かなり-」が新聞・小説の両方で現れているほかは新聞のみで「-な」の形式が１～２例現れている。しかし、この６語のグラフは後述する「-の」の形式のみで使用される場合のグラフに近い(グラフ18参照)。この点で先の[固有-、特有-、共通-]とは区別できる。




以上、これら四つの傾向から形式の表れ方にはテキストタイプが影響していると推測することができる。しかし、「-な」の形式の用例数が少ない語があることやグラフの現れ方が「-の」の形式のみで使用される場合に近い語があることの二点から「-な」の形式は例外的な用例である可能性もあり、断言はできない。

５．１．２．新聞・小説で「-な」と「-の」の形式が占める割合に変化があるもの

この傾向に属する９語はグラフからさらに以下の二つの傾向を導くことができる。

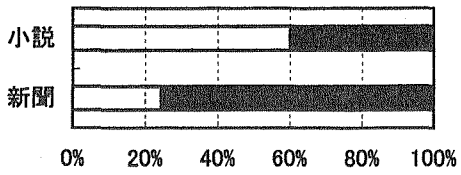
① 新聞・小説で「-な」と「-の」の形式の占める割合が逆転しているもの

【表８】形式が占める割合による対象語の分類

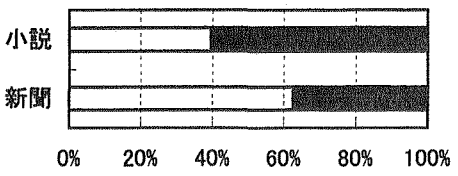
| | 新聞 | 小説 |
|---|---|---|
| 格別-、過剰- | 「-な」の形式<「-の」の形式 | 「-な」の形式>「-の」の形式 |
| 相当-、正式-、手近- | 「-な」の形式>「-の」の形式 | 「-な」の形式<「-の」の形式 |

この傾向に属する語は５語あった。形式が占める割合によって分類すると上表のようになる。これら５語については形式が選択される一要因としてテキストタイプが絡んでいるのではないかと考えられる。また、「格別-」「相当-」は新聞データでは「-な」と「-の」の形式がそれぞれある程度の割合を占めて揺れている。テキストタイプの性格上、この揺れには言語意識では区別できない要因があるのではないか。

グラフ11:格別-



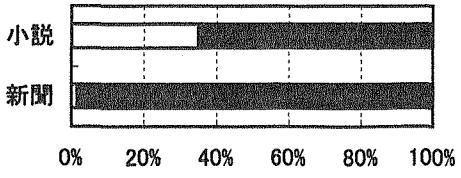

グラフ12:相当-



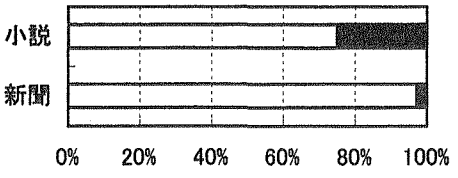

② 新聞で一方の形式が圧倒的な割合を占め、小説で他方の形式がある程度の割合を占めるもの

この傾向に属する語は4語あった。「同様-」「独自-」「別-」の３語は小説で「-な」の形式がある程度の割合を占め、「不審-」は小説で「-の」の形式がある程度の割合を占めている。これら４語は形式が選択される一要因としてテキストタイプが絡んでいると考えられる。しかし、小説で現れる別の形式の用例数が少ないものもあり、例外的な用例の可能性がある点に注意しなければならない。

グラフ13:別-



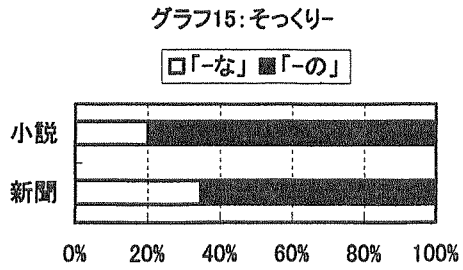

グラフ14:不審-

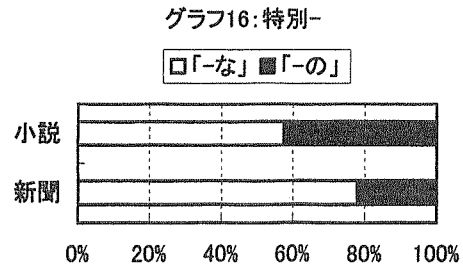


5．1．3．その他のもの

これまで述べた傾向のいずれにもあてはまらない語は5語あった。グラフよりこの5語は小説より新聞の方が「-な」の形式が使用される割合が大きい。また、新聞データでは「-な」と「-の」の形式がそれぞれある程度の割合を占めて揺れている。テキストタイプの性格上、この揺れ方には言語意識では区別できない要因があるのではないか。この5語は形式が占める割合によって二つに分けることができる。

- 「-な」の形式＜「-の」の形式：無用-、そっくり-、かんじん-
- 「-な」の形式＞「-の」の形式：特別-、透明-

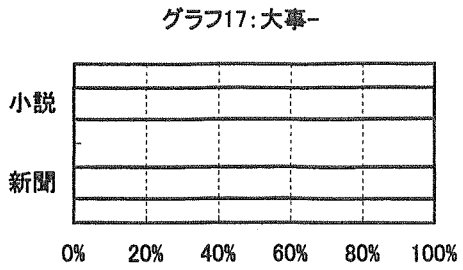


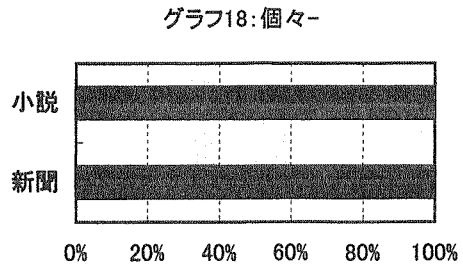




5．2．「-な」と「-の」の形式がどちらか一方の形式のみで使用される場合

- 「-な」の形式のみ：大事-、大好き-、中途半ぱ-、著名-、手ごろ-、不きげん-、真赤-（7語）
- 「-の」の形式のみ：厚手-、異色-、薄手-、大つぶ-、個々-、最善-、たいてい-、たくさん-、直接-、特定-、はじめて-、反対-、普通-、別個-、別々-、無限-、無実-、文字どおり-、よほど-(19語)

新聞・小説のいずれも「-な」と「-の」の形式がどちらか一方の形式のみで使用される場合は26語あった。これらの語は現代日本語では「-な」と「-の」の形式が揺れずに使われているといえる。また、5.1.1.との比較として「大事-」「個々-」のグラフを示しておく。



## 6．通時的観点からの分析

次に通時的観点からの分析を試みる。明治期と現代の小説の結果から「-な」と「-の」の形式について、それぞれの割合がどのように変化してきたのか。そして、そこからどういう傾向を読み取ることができるのかということを考えていきたい。

明治小説・現代小説の両方のデータについて、「-な」と「-の」の形式の数値でいずれの形式の数値も5未満でない38語を分析対象語として用いる。分析対象語全体の用例数を表9でまとめる。また、分析対象語ごとの数値を表10で示す。

【表9】分析対象語全体の用例数（通時的・38語）

| | 現代小説 | 明治小説 | 合計 |
|---|---|---|---|
| 「-な」 | 547 | 437 | 984 |
| 「-の」 | 626 | 739 | 1365 |
| 合計 | 1173 | 1176 | 2349 |

【表10】分析対象語別結果（通時的観点）

| | 現代小説 | | 明治小説 | | | 現代小説 | | 明治小説 | |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| | 「-な」 | 「-の」 | 「-な」 | 「-の」 | | 「-な」 | 「-の」 | 「-な」 | 「-の」 |
| 意外 | 22 | 0 | 20 | 9 | 手近 | 4 | 12 | 5 | 2 |
| 異常 | 33 | 3 | 8 | 1 | 当然 | 6 | 59 | 1 | 15 |
| いろいろ | 58 | 2 | 145 | 58 | 透明 | 33 | 14 | 10 | 1 |
| 色白 | 3 | 14 | 2 | 10 | 同様 | 5 | 9 | 3 | 21 |
| 永遠 | 0 | 14 | 0 | 7 | 特別 | 23 | 17 | 13 | 17 |
| 大つぶ | 0 | 12 | 5 | 2 | 特有 | 0 | 10 | 9 | 3 |
| 格別 | 6 | 4 | 3 | 12 | はじめて | 0 | 69 | 0 | 19 |
| かんじん | 6 | 17 | 5 | 36 | 反対 | 0 | 22 | 0 | 42 |
| 旧式 | 1 | 5 | 3 | 8 | 秘密 | 0 | 13 | 3 | 10 |
| 共通 | 0 | 23 | 9 | 0 | 不審 | 9 | 3 | 7 | 9 |
| 個々 | 0 | 8 | 0 | 6 | 普通 | 0 | 77 | 6 | 186 |
| 古風 | 12 | 0 | 19 | 2 | 別 | 61 | 114 | 10 | 31 |
| さまざま | 84 | 8 | 2 | 33 | 真赤 | 17 | 0 | 7 | 0 |
| 種々 | 0 | 8 | 33 | 38 | 真暗 | 13 | 1 | 12 | 0 |
| 純粋 | 22 | 4 | 8 | 11 | 真黒 | 8 | 0 | 25 | 1 |
| 相当 | 17 | 26 | 2 | 35 | 無限 | 0 | 13 | 0 | 20 |
| 大事 | 47 | 0 | 32 | 13 | 無用 | 2 | 5 | 3 | 11 |
| たいてい | 0 | 25 | 12 | 48 | よほど | 0 | 9 | 0 | 13 |
| 手ごろ | 6 | 0 | 8 | 2 | わずか | 49 | 6 | 7 | 7 |
| | | | | | 合計 | 547 | 626 | 437 | 739 |

分析対象語の調査結果の中には、明治・現代のいずれの時代でも「-な」と「-の」の形

式がどちらか一方の形式のみで使用される語が見られる。これらの語は明治から現代にかけて通時的変化が、明らかに起きていないといえる。分析ではこの通時的変化が起きていない７語を残りの31語と区別して考えることにする。よって、この章では二つの場合に分けて考える。

- 通時的変化の可能性がある場合（６．１．）
- 通時的変化が明らかに見られない場合（６．２．）

## ６．１．通時的変化の可能性がある場合

分析対象語のうち、31語は明治から現代にかけて通時的変化が起きていると考えられる。さらに詳しく分析していくために、この31語の調査結果を５章と同様にグラフで表す。すると、「-な」の形式の使用が増加する場合と「-の」の形式の使用が増加する場合との二つの通時的変化を読み取ることができる。これまで通時的変化の可能性について述べた先行研究はあった(桜井1964など)。しかし、二つの通時的変化があることは先行研究では全く取り上げられていないことであり、非常に興味深い現象である。表11で全体像を示し、詳しく見ていく。

【表11】分析対象語31語の傾向

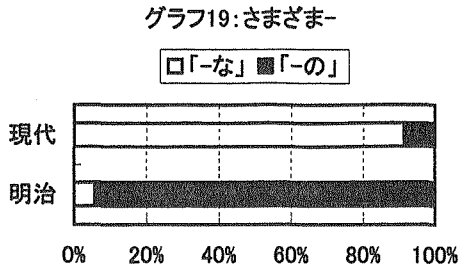
| | 形式が占める割合 | 増加する形式 | |
|---|---|---|---|
| 純粋-、さまざま-、わずか-、不審-、格別-、特別- | 明治：「-な」<「-の」<br>現代：「-な」>「-の」 | 〈第二形容詞〉「-な」 | |
| 意外-、古風-、真黒-、大事-、手ごろ- | 明治・現代ともに「-な」>「-の」 | | 現代では「-な」の形式が単独で使われる |
| いろいろ-、異常- | | | |
| 当然-、色白-、相当-、同様-、別-、無用-、かんじん- | 明治・現代ともに「-な」<「-の」 | | |
| 共通-、特有-、大つぶ- | 明治：「-な」>「-の」<br>現代：「-な」<「-の」 | 〈第三形容詞〉(の候補)「-の」 | 現代では「-の」の形式が単独で使われる |
| 手近- | | | |
| 種々-、秘密-、たいてい-、普通- | 明治・現代ともに「-な」<「-の」 | | 現代では「-の」の形式が単独で使われる |
| 旧式- | | | |
| 透明-、真暗- | 明治・現代ともに「-な」>「-の」 | | |

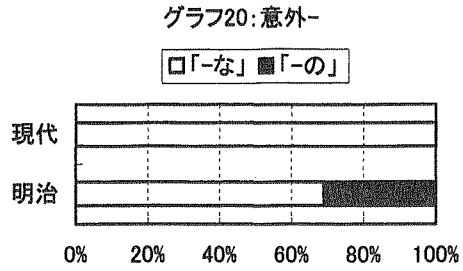
6．1．1．明治から現代にかけて「-な」の形式の使用が増加したもの

この傾向に属する20語は明治から現代にかけて「-な」の形式の使用が増加したものである。グラフからさらに次の四つの傾向を指摘することができる。

(a) **[純粋-、さまざま-、不審-、わずか-、格別-、特別-]**：明治期と現代で「-な」と「-の」の占める割合が逆転している。しかし、「格別-」はテキストタイプによって形式の占める割合が逆転している（5．1．2．参照）という点に注意しておく必要がある。

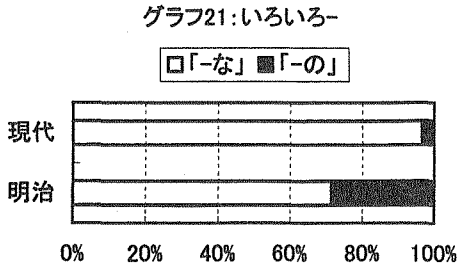
(b) **[大事-、古風-、意外-、手ごろ-、真黒-]**：明治期で「-な」と「-の」の形式が併用されていた語が現代では「-な」の形式のみで使われている。

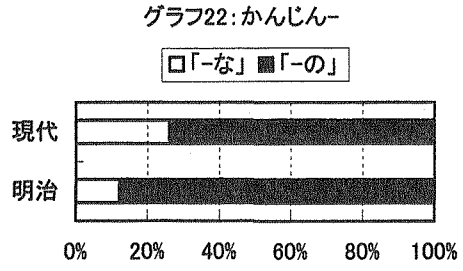



(c) **[いろいろ-、異常-]**：明治期・現代ともに形式が占める割合は「-な」の形式＞「-の」の形式であり「-な」の形式の割合が明治期から現代にかけて増加している。

(d) **[同様-、相当-、別-、無用-、かんじん-、当然-、色白-]**：明治期・現代ともに形式が占める割合は「-な」の形式＜「-の」の形式であり、「-な」の形式の割合が明治期から現代にかけて増加している。

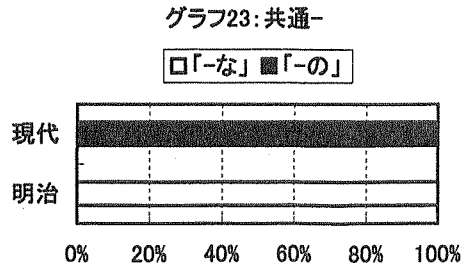


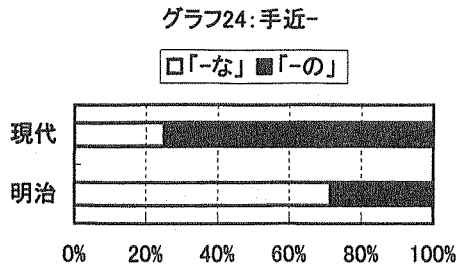




6．1．2．明治から現代にかけて「-の」の形式の使用が増加したもの

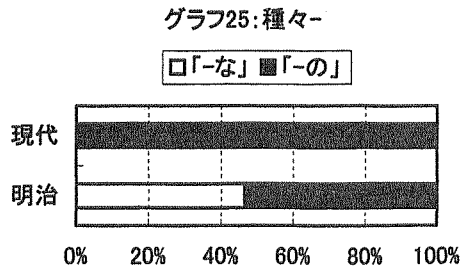
この傾向に属する11語は明治から現代にかけて「-の」の形式の使用が増加したものである。グラフからさらに次の三つの傾向を指摘できる。

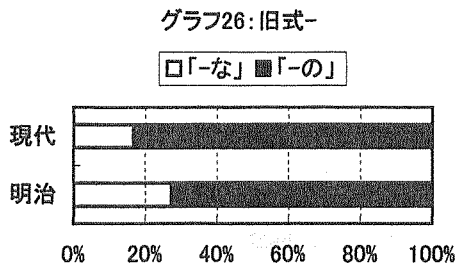
(a)　[共通-、大つぶ-、特有-、手近-]：明治期と現代で「-な」と「-の」の形式の占める割合が逆転しているものである。「手近-」を除く3語は現代では「-の」の形式のみで使われている。特に「共通-」は明治期では「-な」の形式のみで使われていたのが現代では「-の」の形式のみで使われている形へと変化している。また、「手近-」はテキストタイプによって形式の占める割合が逆転している（5．1．2．参照）という点に注意しておく必要がある。



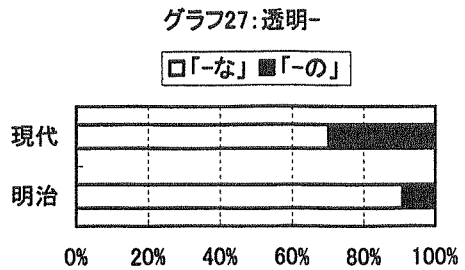




(b)　[種々-、たいてい-、秘密-、普通-、旧式-]：明治期・現代ともに形式が占める割合は「-な」の形式＜「-の」の形式であり、「-の」の形式の割合が明治期から現代にかけて増加しているものである。「旧式-」を除く4語は現代では「-の」の形式のみで使われている。




(c)　[透明-、真暗-]：明治期・現代ともに形式が占める割合は「-な」の形式＞「-の」の形式であり、「-の」の形式の割合が明治期から現代にかけて増加しているものである。

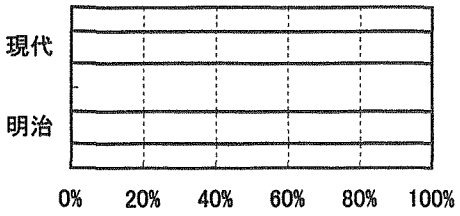


### 6．2．通時的変化が明らかに見られない場合

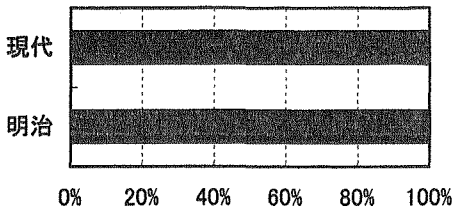
- 「-な」の形式：真赤-
- 「-の」の形式：永遠-、個々-、はじめて-、反対-、無限-、よほど-

明治・現代のいずれも「-な」と「-の」の形式がどちらか一方の形式のみで使われている場合が7語あった。これらの語は明治から現代にかけて通時的変化が明らかに起きていないと考えられる。このうち、「永遠-」は5章の共時的観点からの分析で新聞データに形式の併用が見られる。しかし、1例だけということもあり例外として現れたという可能性も否めない。その他の語は共時的観点からの分析でも「-な」と「-の」の形式がどちらか一方の形式のみで使用される場合に位置づけられる(5．2．参照)。よって、この場合に属する語については明治期から使用される形式が確立しているといえる。また、6．1．との比較として「真赤-」と「個々-」のグラフを示しておく。

グラフ28:真赤-




グラフ29:個々-




## 7．まとめと今後の課題

### 7．1．本研究の結論

本研究で明らかになったことをまとめると以下の二点になる。

① 〈第二形容詞〉と〈第三形容詞〉(の候補)が揺れるといってもその揺れ方は様々である。本研究では大きく二つの傾向を見出すことができる。

1)〈第二形容詞〉と〈第三形容詞〉(の候補)のいずれかが圧倒的な割合を占めて揺れる語がある。この中には〈第二形容詞〉または〈第三形容詞〉(の候補)がどちらか一方の形式のみで使われる場合へと近づきつつある語があることも指摘できる。

例)「純粋-」など(〈第二形容詞〉が圧倒的)

「必死-」など(〈第三形容詞〉(の候補)が圧倒的)

2)〈第二形容詞〉と〈第三形容詞〉(の候補)がテキストタイプによって形式が占める割合が変わる語がある。

- 新聞・小説で形式の占める割合が逆転する場合
  例)「格別-」「相当-」など
- 新聞で一方の形式が圧倒的な割合を占め、小説で他方の形式がある程度の割合を占める場合
  例)「別-」など

② 〈第二形容詞〉と〈第三形容詞〉(の候補)の揺れの中には通時的変化を見出すことができる。

- 明治と現代とで二つの形式の占める割合が逆転する場合がある
  例)「さまざま-」「共通-」など
- 通時的変化には〈第二形容詞〉の占める割合が増加する場合と〈第三形容詞〉の占める割合が増加する場合との二つの方向の変化がある
  例)「特別-」「意外-」など(〈第二形容詞〉の占める割合が増加)
  「特有-」「種々-」など(〈第三形容詞〉(の候補)の占める割合が増加)

以上より、〈第二形容詞〉と〈第三形容詞〉(の候補)の揺れの要因として、少なくとも①単語自体の語彙的性格、②テキストタイプ、③時代差の三つが絡んでいることを指摘することができる。ただ、大量に用例を収集したとはいえ、調査するデータが限られていたこともあり、出てきた結果が例外的な結果である疑いもある。しかし、限定されたデータとはいえ、収集した用例を丹念に見ていくことで、田野村(2002)が指摘するような「揺れの要因が複合的に支配されている」ことを実際の資料から検証できた点で本研究はある程度の成果があるのではないかと確信している。

また、校閲を通し、言語意識の要因が出にくい新聞データでも〈第二形容詞〉と〈第三形容詞〉(の候補)がそれぞれある程度の割合を占めて揺れている語があることを導いた。このことから研究方法に関して以下の二点を指摘したい。

- 「言いかえ可能かどうか」といった言語内的分析を単純には行えない
- 安易にアンケート調査を行っても、正確な分析結果を得ることはできない

従来にも「言いかえ可能かどうか」いうような意識調査は行われてきた。しかし、本研究での結果のように共時的にも通時的にもいくつもの要因から揺れて変化しているということを確認せずに安易に意識調査を行っても〈第二形容詞〉と〈第三形容詞〉(の候補)の揺れについて、正確な結果を得ることはできないのである。

## 7．2．今後の課題

最後に、これまでの記述を踏まえた上で今後の課題と展望を記していきたい。

### ① 質的な観点からの分析の必要性

本稿は〈質的な観点〉からの分析に至る第一歩と位置づけた上で、〈量的な観点〉からの分析に主眼を置いてきた。しかし、本来の目的である〈質的な観点〉からの分析を無視しているわけではない。用例を丹念に調べた上での分析をしていく必要がある。その際には本研究の結論で位置づけたように「複合的に支配されている要因である」ことに留意して行わなければならないだろう。ゆえに、用例を丹念に見る上で、データの幅を広げる、通時的視点を取り入れるなどマクロな視点を常に意識しておく必要がある。

### ② 品詞論的位置づけの精密化

本研究では品詞について深く言及しないという立場から、〈第二形容詞〉と〈第三形容詞〉（の候補）の揺れと位置づけて調査・分析を行ってきた。調査・分析をより精密なものにするために、調査対象語140語の格体系についてきちんと調べる必要がある。その結果によって、〈第三形容詞〉の精密な認定をすることができるとともに、本研究での傾向を品詞論的に位置づけることが可能になり、〈第二形容詞〉と〈第三形容詞〉の揺れの正確な傾向を導くことができる。

名詞と第二形容詞、名詞と第三形容詞はそれぞれ連続性をもった関係であることは本論文でも述べてきた。ゆえに本研究での内容をより発展したものにするためには、名詞と形容詞についてさらに理解を深めていかなければならない。それに伴って、〈第二形容詞〉と〈第三形容詞〉の揺れを、名詞と〈第二形容詞〉のかさなり、名詞のノ格の用法、形容詞の規定語としての用法などと比較して考える必要がある。その比較から相違点を導き出すことによって、名詞と形容詞の規定語としての用法を体系的にとらえることができるのではないか。

以上の②で述べた問題は、本論の最初で述べた「梅田なお店」のような表現について分析するための前提となるであろう。実際にどのような実例が見られるかを以下の表に示す。この表を見ると次のようなことが言えるであろう。

- 名詞のタイプはカタカナ表記の名詞、固有名詞が特徴的である。しかし、普通名詞もこのような表現を作ることができる。
- 見出しや写真のキャプション、広告などで現れる。これは読者を印象付ける効果があるのではないかと思われる。しかし、テキスト本文で現れる場合[9]も出てきている。

● 「　」でくくられて表記される場合が普通名詞に多い。このことは読者を印象付ける効果があるとともに、この表現に対して使う側が「普通の言い方ではない」という意識を持って使っていることを表しているのではないかと思われる。

【表12】「梅田なお店」表現の用例リスト

| | |
|---|---|
| カタカナ表記語 | ・ニュースなデパート、絶対チェック！（阪急百貨店の吊り広告見出し）<br>・「ニュースなボブ」に乗り換えよう（MORE 9月号の見出し）<br>・スフレなチーズケーキ（菓子の名前）<br>・エステな生活（菓子の名前）<br>・ストリートな人々（産経夕刊連載記事見出し）<br>・マリンな深Vボーダー（non-no No.13：p.39写真キャプション）<br>・コンビニな感じ！アコム。（駅構内の企業広告コピー）<br>・ソーダ（?）な感じのメロディーを集めた…（新聞広告リード文）<br>・「プチヒップ」なカーゴ（non-no NO.1の見出し一部）<br>・スラムダンクな友情論（本の見出し） |
| 固有名詞 | ・梅田なお店、神戸なお店、京都なお店、宝塚・北摂なお店（いずれも阪急ブックスから刊行されている書籍タイトル名）<br>・レオパレスな人々（テレビCMのタイトル）<br>・hitomiな女性（AERA見出しの一部）<br>・ホンジャマカな日曜日（テレビ番組名） |
| 普通名詞 | ・「日本代表」な部屋（関西じゃらん見出し）<br>・30すぎても「女子」な気分（AERA No.22見出し）<br>・軍団な感じ（AERA No.22：本文p.11）<br>・大人なノースリーブもOK（non-no No.13：p.63写真キャプション）<br>・「美脚」なチェックパンツ（non-no NO.1の見出し一部） |

● 調査資料はいずれも2002年のものである。調査資料の正確な出典など未情報のものがあるが、実際にこのような用例があったという方針から載せた。執筆者の内省から載せたものではないことをことわっておく。

この他にも、以下の例のように〈名詞〉を〈第二形容詞〉化するだけではなく、句を〈第二形容詞〉化している表現も見られる。

(7) おしゃれでスタイルよく見える人がそっと明かす 「実は……」な お話こそ、ヒントの宝庫（non-no No.13）

(8) “毎日が金八先生”な 教員ライフは熱意と給料のギャップが激しい（non-no No.13）

今後は①②の問題を踏まえた上で、以上のような表現が生まれる根拠をさらに探っていきたい。

【注】

1）田野村（2002）では以下の三つの要因を挙げている。

- 形容動詞そのものの種類や性質による
- 形容動詞連体形が現れる文脈に依存している
- 時代差・文体差・個人差などによる

2）刊行年が1956(昭和31)年の雑誌90種を対象とし、サンプリングを行った上でカード化して集計、語彙表を作成し、分析をしている。

3）例えば、桜井（1964）や田野村（2002）では「-の」の形式を形容動詞連体形としている（但し、田野村（2002）は品詞認定の問題を考慮しないという前提を置いている）。

4）鈴木(1972)では以下の二つの例文は下線部分全体を一つの文の部分であるとしている。しかし、本研究では名詞にかかるものは全て規定語とみなして考える。つまり、以下の二つの例文で二重下線部分を規定語として考えることになる。

- 三郎は大きな声でしゃべっている。(鈴木1972：137)
- 祖母はがんじょうなたちだった。(鈴木1972：137)

5）鈴木（1980）にはノ格の意味は一定の条件のもとで、〈属性規定的〉な意味になり、部分的に形容詞化の傾向にあるとみとめられるという記述がある。例えば、「茶色の小びん」「あげぞこのとっくり」などは〈属性規定的〉な意味である。

6）村木（2000）では〈第三形容詞〉に位置づけられる単語群には合成語が目立ち、辞書の見出しとして登録されにくいとある。

7）格体系を持つと思われる「秘密-」「名誉-」「異常-」について、新聞データから「-ガ」「-ヲ」「-ニ」の形式を抽出して格体系を持つかどうか予備的に調査した。その結果を以下に示す。

- 秘密-：「-ノ」105例「-ガ」43例「-ヲ」104例「-ニ」53例
- 名誉-：「-ノ」22例「-ガ」11例「-ヲ」152例「-ニ」17例
- 異常-：「-ノ」11例「-ガ」195例「-ヲ」100例「-ニ」122例(副詞化したものを含む)

この結果よりこれらの語は名詞性を強く持っていると考えられ、完全に〈第三形容詞〉であるとは言い難い。

8）格体系を（部分的に）保持していても規定語の文法的意味が〈属性規定的〉であるものはこの位置づけに含める。しかし、規定語の文法的意味が〈関係規定的〉であるものは用例に含めない。

9）例えば、表12で挙げている「軍団な感じ」は以下のように用いられている。

- 「女子とか言うと軍団な感じ。個性ありません、『自分って何だろう』と考えてませんって言っている感じだよ。そういう意味で、『おやじ』と同義語。もっと個人で目立って、抜け出さなきゃ」(AERA No.22：本文 p.11)

また、見出しで使われた語が本文で繰り返し使われる場合もある（表12の「女子」な気分を例にする）。

- と、ここまで女子な気分、少しおわかりいただけたでしょうか。(AERA No.22：本文 p.11)

**【調査資料】**

＜新聞＞

『毎日新聞全文記事データベース　CD－毎日新聞2000年版』（毎日2000）

＜小説（明治期）＞

CD『新潮文庫　明治の文豪』

二葉亭四迷「平凡」「浮雲」「其面影」／森鷗外「雁」「青年」「キタ・セクスアリス」／国木田独歩「武蔵野」「牛肉と馬鈴薯」「酒中日記」／田山花袋「蒲団」「重右衛門の最後」「田舎教師」「生」／夏目漱石「吾輩は猫である」「倫敦塔」「幻影の盾」「坊っちゃん」「三四郎」「それから」「門」「草枕」「虞美人草」「彼岸過迄」「行人」「二百十日」「野分け」「坑夫」「文鳥」「夢十夜」／伊藤左千夫「野菊の墓」／泉鏡花「歌行燈」「高野聖」「婦系図」／長塚節「土」

＜小説（現代）＞

CD『新潮文庫の100冊』

赤川次郎「女社長に乾杯！」／沢木耕太郎「一瞬の夏」／椎名誠「新橋烏森口青春篇」／宮本輝「錦繍」

CD『新潮文庫の絶版100冊』

石川達三「七人の敵が居た」／井上ひさし「下駄の上の卵」／大岡昇平「ながい旅」／加賀乙彦「湿原」／米谷ふみ子「過越しの祭」／青山光二「われらが風狂の師」

青空文庫（http://www.aozora.gr.jp/）

藤下真潮「アズ」「イブ-覚醒儀式-」「インターミッション」「歌-黄泉戸喫-」／冬佳彰「水底の星々」「泥と雪」／山本光夫「ヘミングバードの囁き」／山本洋「メロディー」「窓の外」／早見秋「レズビアン・ライフ」「十八歳のモノローグ」「装飾の性」／佐野良二「青い夏」「五味氏の宝物」「尾なし犬」「鹿の話」「飛び出しナイフ」「われらリフター」「闇の力」／植松眞人「雨のボレックス」「コーヒーメーカー」「逢瀬までの」／瓶井めぐみ「偶然は透明な蒼」／高野敦志「漁火」／小泉英政「みみず物語」「みみず物語2」／小葉武史「sophia」／西府章「対州風聞書」／弾射音「太陽が山並みに沈むとき」

＜表12主要参考資料（「梅田なお店」表現のリスト）＞

「Kansai Walker」No.23（角川書店）／「AERA」No.22（朝日新聞社）／「non-no」No.13, No.1（2003）（集英社）／「朝日新聞」

**【参考文献】**

菊地恵輔（2002）「連体修飾表現「～ナ」「～ノ」の揺れと問題点　―「ノ形容詞」の可能性―」『日本語教育論集』第11号（姫路獨協大学大学院言語教育研究科日本語教育領域）

国立国語研究所（1962）『現代雑誌九十種の用語用字』秀英出版

桜井光昭（1964）「「名誉の」と「名誉な」」『口語文法講座3　ゆれている文法』明治書院

島田雅晴（2001）「述語名詞の「な」と「の」の選択に関する一考察」『意味と形のインターフェース　下巻』くろしお出版

鈴木重幸（1972）『日本語文法・形態論』むぎ書房

――――（1980）「品詞をめぐって」『教育国語』62（鈴木重幸1996『形態論・序説』むぎ書房に所

収)
高橋太郎（1997)「連体機能をめぐって」『日本語文法　体系と方法』ひつじ書房
高橋太郎ほか（2001)『日本語の文法』講義テキスト（未公刊)
田野村忠温（2002)「形容動詞連体形における「な/の」選択の一要因　—「有名な」と「無名の」—」『計量国語学』第23巻4号
土屋信一（1971)「東京語の語法のゆれ　児童生徒言語調査報告(2)」『NHK 文研月報』21-9
林大編（1982)『図説日本語』角川書店（角川小事典)
松下厚（1975)「「自由の女神」と「自由な女神」—名詞と形容動詞—」『新・日本語講座2』汐文社
宮島達夫(1965)「いくつかの文法的類義表現について」国立国語研究所論集2『ことばの研究2』
村木新次郎（1998)「名詞と形容詞の境界」『月刊言語』27-3（大修館書店)
———（2000)「「がらあき—」「ひとかど—」は名詞か、形容詞か」『国語学研究』39(東北大学)

（卒業生）

（2003年9月1日　受付）
（2003年10月15日修正版受付）
（2003年11月11日再修正版受付）
（2003年11月12日掲載決定）